

法海

今回のテーマ
博多萬行寺と
龍華孤児院

このたびの東日本大震災はこの国に大きな災禍をもたらしましたが、日本では過去、こうした災害に見舞われた際、仏教徒などの宗教関係者が救援活動や慈善事業に力を尽くしてきました。今回のこのコーナーは、そうした活動のルーツに迫ります。

明治時代の 大災害時における 慈善事業と仏教徒の 活動を紐解くと…

去 る3月11日に発生した東北関東大震災は、1カ月を経過しても未だその被害の全貌がつかめないほどの広範囲で深刻な惨禍をもたらしました。加えて巨大地震と大津波がその引き金と言われますが、東京電力の福島第一原子力発電所の事故は、この震災の性格を複雑なものとし、世界も注視するなか、事故炉の制御の見通しを含めて、歴史上未曾有の課題を突きつけているようです。

地震発生直後の報道で、とりわけ衝撃を受けたのは押し寄せる大津波が堤防を乗り越えて、海辺の家々や

車や町を瞬く間に飲み込んでいく目を疑うような光景でした。そして、その時ふと思いつきされたことが、1896(明治29)年の三陸大津波と震災孤児たちのことでした。この大津波については、過去にこの地方を襲った前例として報道でも触れられていましたが、さらに、その少し前の1891(明治24)年10月には、濃尾地方に大地震が起こり、岐阜県を中心に1万5,000人を超える死傷者が出ています。その後起きたこの三陸の大津波では、岩手県を中心に宮城、青森と合わせて3万人近くの死傷者を出しています。

この二つの巨大震災は、たくさんの生命を奪っただけでなくさまざまな災禍をもたらしましたが、その被

災者たちへの種々の救援活動を呼び覚まし、とくに震災孤児の救済は、この国の近代育児事業の起点の一つともなりました。そして、これらの救援活動には仏教やキリスト教の各種の団体や寺院、僧侶たちがそれぞれ一隅での役割を担っています。二例を挙げれば、明治初期の仏教慈善施設を代表する福田会育児院でも十余名

の震災孤児を引き取ってその養育にあたりました。

福岡の近代慈善事業の発祥 龍華孤児院と 萬行寺・七里順之師

ところで、この福岡の地で近代慈善事業の起点を成すのは、博多の浄土真宗本願寺派萬行寺の住職であった七里順之師が創設した



▲大正期の龍華孤児院。

「龍華孤児院」という育児施設です。高僧の誉れ高かった父恒順師の遺志を継いで、寺内にあつた学寮を院舎に充てて、三陸大津波から少し後の1899(明治32)年7月に開院されています。その開始当時の入所児は9名ほどですが、同じ年、産房地筑豊の田川郡で起きた豊国炭坑でのガス爆発事故の犠牲者(死者)210人たちの遺孤児4名がその中には含まれています。

その設立の趣意書には、「世に不幸なる類い数多かるべしと雖もその幼くして早く父母に別れて頼る辺なき孤児又貧困にしてその子を鞠育すること能はざるほど悲惨なるはなかるべし」と述べられ、「慈恵博く施し仁愛兼濟ふは仏陀の教ふる所」であつて、「大悲の心を体すへき」我等仏教徒がこれを「傍觀默視」しておけるだろうかと問いかけ、「希くは同情の諸君不幸頼る辺なき孤児と之に類する貧兒を見聞し玉は、速に本院に通告せられんことを」と訴えています。

さて、このような仏教徒の社会的実践は、もちろん慈善や社会事業の分野に限られたものではありません。

また、こうした慈善活動が、つねに何らかの災害をきっかけとして取り組まれてきたわけでもありませんが、慈悲の教えを導きの糸として、生活の日常、非日常のなかで苦難に直面する人々への仏教徒の社会事業活動は、この国の福祉基盤を構成するひとつのルーツをなしています。その足跡が記録に遺されている資料類を蒐集・選定して、近く『戦前期仏教社会事業資料集成』(全14巻、不二出版で発行予定)を順次刊行していく予定です。

今回の執筆者

本学文学部人間福祉学科教授
高石 史人

主編著に「筑豊の孤老たち—19の証言」(1979年)、『福岡県社会福祉事業史・上巻』(1982年)、『靖国問題関連年表』(1990年)、『仏教福祉への視座』(2005年)など。

